

【特集】文化芸術分野における大原社会問題 研究所資料：セツルメント活動と「アー ト」の実践：帝大・川崎・興望館セツルメ ントにおける新旧の事例から

古家, 満葉 / FURUIE, Mitsuha

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

779・780

(開始ページ / Start Page)

26

(終了ページ / End Page)

36

(発行年 / Year)

2023-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030414>



① 「帝大セツルメント労働学校生徒募集」ポスター
(帝大セツルメント労働学校発行，1928年5月)



③



④



② セツルメント・ハウス全景
(『東京帝国大学セツルメント年報』7号，
東京帝国大学セツルメント，1931年6月)



⑤

③～⑤ 「共に在るところから / With People, Not For People」展

(主催：東京都，公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京，「隅田川 森羅万象 墨に夢」実行委員会，一般社団法人藝と) 会場風景 撮影：加藤甫

セツルメント活動と「アート」の実践

——帝大・川崎・興望館セツルメントにおける新旧の事例から

古家 満葉

はじめに

- 1 「ケア」, 「アート」, 「セツルメント」
- 2 帝大セツルメントと今和次郎
- 3 かこさとしの紙芝居と川崎セツルメント子ども会
- 4 興望館セツルメントと現代アートの実践

おわりに

はじめに

2018年8月に川崎市市民ミュージアムで担当した小企画「川崎セツルメント展——地域に根差した社会事業」では、同時期に開催された企画展「かこさとしのひみつ」展に合わせて、絵本作家として知られるかこの創作の原点であった川崎セツルメントの活動や、戦後における川崎の様相を探るため、成人学級や婦人学級も含めた地域の社会福祉活動に関する史資料を展示した。戦後のセツルメント活動に関係する資料は未だ活動者の手元に保管されているか、既に散逸していることも多いのだが、展示に向けて調査する中で、法政大学大原社会問題研究所に戦後の学生セツルメントに関する冊子類や、戦前に行われた帝大セツルメント関連資料が収蔵されていることが分かった。本稿では、その際に拝借した資料の一部を紹介すると共に、セツルメント活動と芸術文化——いわゆる「アート」との接点を考えてみたい。

1 「ケア」, 「アート」, 「セツルメント」

近年、福祉と芸術の関係は、しばしば「ケア」と「アート」という言葉に置き換えられ、書籍や展示を通して多種多様な実践が報告されている⁽¹⁾。例えば、『美術手帖』は2022年2月号で「ケアの思想とアート」という特集を組み、「ケア」の定義を「『誰もが他者との関係性のなかにある』という事実に基づいた、より広い世界のとらえ方」⁽²⁾であるとして、ケア労働を題材としたものか

(1) 後述の事例のほか、2023年2月には水戸芸術館で「ケアリング/マザーフード——『母』から『他者』のケアを考える現代美術」(担当学芸員:後藤桜子)と題した現代アーティストの作品から社会とケアの関係を考える展覧会が開催されている。

(2) 『美術手帖』74巻1092号, 美術出版社, 2022年2月, 7頁。

ら、他者との関係性から照射する自己を省察する作品まで、現代アーティストによる様々な実践を紹介した。また、2016年に社会人を対象としたDiversity on the Arts Project（通称：DOOR）を開設した東京藝術大学は、人々が幸せに生きるために必要な取り組みとして生まれる創造性を「アート」と定義し、創作活動や芸術鑑賞の機会を作ることを目的に、福祉とアートを学ぶカリキュラムを開講している。プログラムのスタッフを務める東京藝術大学特任教授の伊藤達矢は、「ともすれば、福祉はアートと一番遠い距離にあるもののようにも感じられるかもしれないが、決してそうではない。アートと福祉は、ひとが生きるためにはなくてはならないもの、という点で共通している」⁽³⁾と、その根底に流れる接点を見出している。このような言説を踏まえて、本稿では鶴見俊輔の「限界芸術」への視点を頼りに、「一本のベルトのように連続しているように見える毎日の経験の流れにたいして、句読点をうつようなしかたで働きかけ、単語の流れに独立した一個の文章を構成させる」⁽⁴⁾美的経験を「アート」として捉え、地域福祉としての「ケア」の一側面を担ったセツルメント活動と、人々の生活の中で見出される「アート」の境界面を探りたい。

具体的な実践を参照する上で、まずは「セツルメント (settlement)」の概要を、芸術文化との接点を中心に紹介しよう。セツルメント活動とは、特定の地域における生活の改善を目的とした社会福祉活動のことである。資本主義の発展するイギリスで興ったこの活動は、産業革命によって生じた貧困地域に活動者が定住 (settle) することで地域住民と交流し、彼らの生活の向上を図ることを目指すものであった。1884年にはロンドンのイースト・エンドに活動の拠点となるトインビー・ホールが設立され、その後はセツルメント運動として内外に広がっていく。ホールではアーツ・アンド・クラフツの影響を受けた若者たちが活動しており、食堂の装飾を手がけ美術の授業を受け持っていたチャールズ・ロバート・アシュビー (Charles Robert Ashbee, 1863-1942) は、1888年6月に手工作ギルド学校 (The Guild and School of Handicraft) を開設し、近隣のコマーシャル・ストリート三四番地の倉庫の上階に工房を設けている⁽⁵⁾。また、1901年に同地区に開設されたホワイト・チャペル・ギャラリーでは、ホールの課外活動グループの一つであったトインビー・アート・クラブの年次展示会が1909年より開催されるなど、地域の芸術活動を支援する環境が次第に整っていった様子が窺える⁽⁶⁾。セツルメントの文化的実践は、米国シカゴの貧困地域に1889年にジェーン・アダムス (Jane Addams, 1860-1935) とエレン・ゲイツ・スター (Ellen Gates Starr, 1859-1940) によって設立されたハル・ハウスにおいてもまた顕著であった。コーヒーハウスや図書室、保育所が併設されたハル・ハウスでは、裁縫、料理、合唱、ダンス、演劇などを行うクラブ活動が催され、設立当時から地域住民に対して複製画を貸借する活動を行うなど幅

(3) 伊藤達矢「はじめに」『ケアとアートの教室』左右社、8-9頁。

(4) 鶴見俊輔『限界芸術論』筑摩書房、1999年、11頁。鶴見が具体例として挙げたのは、子どもの生活の中から生まれる遊戯や盆踊りに代表される祭礼等であるが、本稿では範囲を広げて、直接的経験の中で実践される芸術表現とその表現が生み出される場として、その視点を捉えることとしたい。

(5) 藤田治彦「ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動」藤田治彦編『芸術と福祉——アーティストとしての人間』大阪大学出版会、2009年、58頁。トインビー・ホールの芸術教育については、横山千晶『ミュージアムの冒険——イースト・エンドと芸術教育』武藤浩史他編『愛と戦いのイギリス文化史——1900-1950年』慶應義塾大学出版会、2008年に詳しい。

(6) 横山千晶『「ホワイトチャペルの息子たち」——ロンドンのイースト・エンドと現代美術』註5前掲書、78頁。

広い事業を展開し、1891年にはパトラー・アート・ギャラリーが併設、更に1900年には労働ミュージアムが開設された⁽⁷⁾。また、ハウスの創設者であり工芸製本家でもあったスターが創設した製本工房からは、その後に独立して工房を開設する生徒が出るなど、実際の労働環境にも少なからず影響を与えている。日本では明治期にキリスト教の宣教師によってはじめてセツルメントの発想が伝えられ、健康相談や教育事業を中心とした隣保事業として発展した。中でも、渡英中にトインビー・ホールを訪れて感銘を受けた片山潜（1859-1933）が、1897（明治30）年に創設した東京神田三崎町のキングスレー館は、日本最初のセツルメントとして知られている。片山の自伝によると、キングスレー館の根本の目的は社会改良事業であり、「事業で最も成功したのは、その渡米案内であった」⁽⁸⁾ ようで、当時の片山がキリスト教徒だったことから三崎町の町民からはあまり歓迎されなかったという⁽⁹⁾。キングスレー館では幼稚園の運営や社会講義のほか、夜間には「小僧夜学校」⁽¹⁰⁾として英語を学ぶ講座が開かれた。その生徒の中には、1901（明治34）年に渡米し、ニューヨークでイラストレーションを学んだ彫刻家、版画家の戸張孤雁（1882-1927）の姿が認められる。孤雁は1906（明治39）年に帰国したのち、1909（明治41）年におそらくはキングスレー館と思われる住所（神田三崎町三丁目一番地十二号）に洋風挿絵研究所を開設しているが、この頃の片山は労働運動に奔走しており、前年には既にキングスレー館の活動は途絶えていた⁽¹¹⁾。

2 帝大セツルメントと今和次郎

先行研究によると、日本のセツルメント活動は、1923（大正12）年9月に発生した関東大震災を契機にその全盛期を迎えたと言われている⁽¹²⁾。被災者への支援活動をきっかけとして、キリスト教社会運動家の賀川豊彦（1888-1960）や、帝国大学法学部教授の末広巖太郎（1888-1951）が働きかけ、東京帝国大学の学生らによって1924（大正13）年に東京帝国大学セツルメント（通称：帝大セツルメント）が本所柳島に発足した⁽¹³⁾。大学拡張運動の流れを受けて始まった帝大セツルメントは、労働者教育、調査活動、法律相談、託児、医療等の盛んな活動によって戦後につながる学生セツルメントの基礎を形作った存在である。末広による設立趣意書には、「知識と労働がまったく別れ別れになって了ったことは現代社会の最も悲む可き欠点である（中略）多数の無産者は天性の才能を抱きつゝも尚到底不完全なる小学校教育以上のものを受けることは出来ない。彼等の多数は貧弱なる智識を与えられたまゝで労働の世界に送り込まれその一生を報ひらざる勤労と憐れむべ

(7) 野村悠里「米国セツルメント・ハウスにおける本づくり——エレン・ゲイツ・スターの工芸製本」『文化資源学 文化の見つけかたと育てかた』新曜社、2021年、148頁。

(8) 片山潜『自伝』改造社、1931年、233頁。

(9) 同上、234頁。

(10) 同上、187頁。

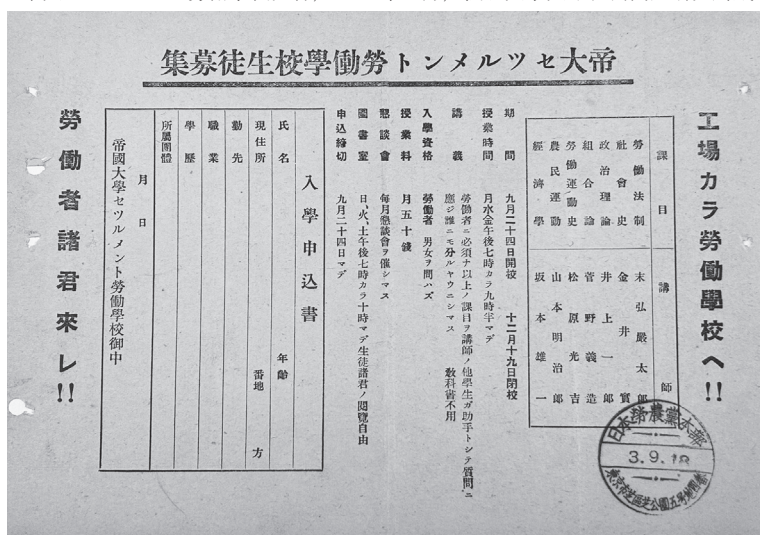
(11) 柴田謙治『貧困と地域福祉活動』みらい、2007年、40頁。

(12) 「第二期 それから昭和12年（1937年）の日支事変まで。これはセツルメントの全盛期であり、日本資本主義の爛熟期にあたる」。西内潔『日本セツルメント研究序説』童心社、1971年、75頁。

(13) 賀川豊彦と帝大セツルメントの救済支援については、藤沢真理子「賀川豊彦と東京帝国大学セツルメント」『東邦学誌』第48巻第1号、愛知東邦大学、2019年6月、15-35頁に詳しい。

図版1 「帝大セツルメント労働学校生徒募集」ピラ

帝大セツルメント労働学校発行、1928年9月、法政大学大原社会問題研究所蔵



き無智との間に過して仕舞ふ」⁽¹⁴⁾ 無産者の置かれた現状を憂いた文言が窺える。このような記述からも分かる通り、帝大セツルメントは隣保事業としての特性を掲げるだけでなく、労働者を中心とした人々への成人教育を最たる目的としていた。大原社会問題研究所には労働学校の生徒を募集するための印刷物が複数残されており、「工場から労働学校へ!!」と力強く銘打たれたポスターには、単純ではあるが対角線や赤色を用いたプロレタリア美術的特徴的な表現が見受けられ、セツラーたちが目指した労働者教育の方向性が視覚的にも伝わるだろう（巻頭iv頁④、図版1）。当時、全国的な息吹を上げてきた無産者階級運動の影響は、労働学校のみならず児童部の教材内容にも顕著に現れており、1930（昭和5）年に制作されたガリ版刷りの『帝大セツルメント児童部 児童学校教材』には、労働や生産技術、資本家と労働者についての講話が述べられ、「世の中に大勢居るのは貧乏人であり労働者である事はもうよく知つて居る。だから大勢の爲に盡すとは貧乏人の爲に働く事だ。そして貧乏人の敵をやっつける事だ。けれども此の敵は非常に強い。僕達が一塊となつて仲良くしなければならぬのは此のためだ」⁽¹⁵⁾ と、団結を促す記述が確認できる。特に1930年代の帝大セツルメントは発足当時に比べて学生の社会事業団としての特色が色濃く、左傾化が問題視され当局に検挙されるセツラーが相次ぎ、時流を受けて1938（昭和13）年には閉鎖が決定したのであった。

さて、このような帝大セツルメントにおいて、「アート」との関わりは如何にして見出せるのだろうか。既に先行研究で詳細に語られているのが、考現学の創始者として知られる今和次郎（1888-1973）が設計を担当したセツルメント・ハウスのことである。今和次郎研究の第一人者で

(14) 『回想の東京帝国大学セツルメント』日本評論社、1984年、4-7頁。

(15) 『帝大セツルメント児童部 児童学校教材』1930年、18頁。

ある青山学院大学客員教授の黒石いずみは、「今和次郎のセツルメント運動への関わりは、彼が関東大震災直後に行ったバラック調査やバラック装飾社、そして考現学の活動と深いつながり」⁽¹⁶⁾ があると述べる。震災後、凄惨たる被害を受けた東京の街を歩き回り、人々の様子を観察しスケッチを続けた今は、庶民の手によって遅しく建ち上がるバラックに感化され、1923（大正12）年9月に「バラックを美しくする仕事一切」を引き受けるバラック装飾社を結成した。そして、1924（大正13）年4月に起工した帝大セツルメント・ハウスの設計は、社会学科のセツラーであった服部之総の友人で、二科会に所属し、バラック装飾社にも参加していた飛鳥哲雄（1895-1997）を通して今に声が掛かったのであった⁽¹⁷⁾。今は、その当時のことを次のように回想している。

嘗つて、関東大震災の直後、わたくしはペンキ屋をはじめ、素朴な慰樂を人々に提供しやうと働いたのであつたが、そのとき、かういふ先生ならと見込まれたのらしいが、東大の學生の有志がやつて来て、本所にセツルメントを建て、研究と教化とに資したいから、といふのでその建物の設計を頼まれて、手傳つた事があるが、そのときの先方の意見は、並のバラックでは不適切だから、何か律調のあるものが欲しい、といふのだつた。（中略）あの当時の情景は正に非常時のそれであつたが、それだけオアシスとしての造形づけられた建物が人々の心理に要求されたのであつたが、急造のバラックは皆、所謂バラックの通念通りに建てられてゐたのであつた。あゝいふ情景の中では、いくらかでも藝術的な雰囲気のある建物は、レコードの音楽かの如く人々の感情をやほらげるのに効果がある。⁽¹⁸⁾

図版2 セツルメント・ハウス全景

『東京帝国大学セツルメント年報』3号、東京帝国大学セツルメント、
1927年6月、法政大学大原社会問題研究所蔵



(16) 黒石いずみ「セツルメントと生活芸術」註5前掲書『芸術と福祉——アーティストとしての人間』、182頁。

(17) 「二月早大理工學科教授今和次郎、二科會バラック装飾研究の飛鳥哲雄兩氏に依頼せる建築設計同案成る。」
『東京帝国大学セツルメント十二年史』東京帝国大学セツルメント、1937年、28-29頁。

(18) 今和次郎『草屋根』相模書房、1941年、335-336頁。

「いくらかでも藝術的な雰囲気のある建物」として設計されたセツルメント・ハウスは、残された写真と図面によると総面積 66.25 坪の 2 階建てで、「日本の在来住宅と英米で 19 世紀末に流行したシングル・スタイルを融合した形態」⁽¹⁹⁾であったことが分かる（巻頭 iv 頁②，前頁図版 2）。2 階の部分に見える三角形の張り出し窓や、大きなガラス窓が各所に配されたセツルメント・ハウスは、「木造構造の部材や工法から導かれる単純で親しみやすいピクチャレスクなデザイン」⁽²⁰⁾として設計された、「心理的なゆとりのある明るく居心地の良い空間」⁽²¹⁾であった。このようなハウスの環境の特徴について、黒石は「柳島の人々にとっての親しみやすさと健康性，明るさと使いやすい機能性，『家』がそなえる象徴的・心理的な意味の表現が重視されている」⁽²²⁾と分析する。確かに，今和次郎はこのような環境を設計することで，前述した回想の通り，ハウスに集う人々に「レコードの音楽かの如く人々の感情をやはらげる」美的経験を促したのであった。

今和次郎と帝大セツルメントの関わりはこれだけでなく，当時主事として活動に参加していた東利久が託児所を設計した際にも内容を確認したり⁽²³⁾，杉浦非水と七人社を結成したことで知られる図案家の新井泉（1902-1983）を児童学校の図画教師として紹介したり⁽²⁴⁾，と継続的に関係を持っていたことが窺える。この帝大セツルメントの児童学校では，地理，科学，作文，ローマ字などのほか，図画や編み物，唱歌の授業が開講され，特に唱歌の授業ではうたごえ運動の創始者である関鑑子（1899-1973）が指導に携わり，クリスティーナ・ロセッティの詩を西条八十が訳して草川信が作曲した『風』を好んで歌ったと伝えられている⁽²⁵⁾。そのほか，児童部では子どもたちに

図版 3 『SETTELEMENT MONTHLY』No.68

1931 年 2 月 1 日，法政大学大原社会問題研究所蔵

SETTELEMENT MONTHLY NO. 74 の 1. 6. 9. 1	
▼労働者教育部 七月十七日 第十九期労働学校 閉校式 卒業生 三二名 ▼少年教育部 少年学校六回，出席平均数二名 映畫觀賞會二回 参加生徒廿名 七月十七日第三期少年学校閉校 式 卒業生一名 現有セツラ 一七名 ▼児童部 出席平均数 オトギ学校一九名 児童学校八七名 セツラー六名 部會六回（中二回臨時），研究會 二回 七月六日卒俱總會 八日第一學期事業批判會及び見 童學校第二回體格検査，臨海學 小誌	校及びキャンプ申込受付メ切 十八日児童学校オトギ学校閉校 式，卒業生 児童学校一二三名 オトギ学校三五名 ▼児童部臨海學校 場所千葉縣君津郡大貫町小學校 期間七月廿八日ヨリ二週間 参加者 児童四九名，指導者十 三名，婦人三名 日課，起床五・三〇朝食六・三〇 學習七・三〇—一〇・三〇晝食一 二，水泳一—三，お八ッ三三〇 入浴四—五，夕食六時，娯樂七 一—八，就寝八・三〇
▼臨海學校，キャンプ會計 天文臺見學 キャンプファイア，廿一日三鷹	三十日町の子供ご合同コードモ會 八月二日陸上運動會 七日座談 會，會者五〇，講師帝大教授小 野清一郎氏，小熊吉藏氏，八日 コドモ展覽會，十日黒くなつて 歸京 ▼児童部キャンプ 場所東京府下調布町上石原東京 児童指導者會共同キャンプ村 期間八月十二日ヨリ十日間 参加者卒俱生十五名指導者三名 小誌 十五日水上運動會，廿日
東京・本所・横川橋・四丁目 帝大セツルメント	

(19) 黒石，註 (16) 前掲書，185 頁。

(20) 同上，186 頁。

(21) 同上。

(22) 同上。

(23) 福島正夫・川島武宜編『穂積・末弘両先生とセツルメント』東京大学セツルメント法律相談部，1963 年，31 頁。

(24) 『〔東京帝国大学セツルメント〕年報』第 3 号，東京帝国大学セツルメント，1927 年 8 月，22 頁。

(25) 宮田親平『だれが風を見たでしょう——ボランディアの原点・東大セツルメント物語』文藝春秋，1995 年，118 頁。

御伽噺を話したり、蓄音機をかけて音楽を聴いたりする「オトギ学校」や、遠足などが行われ、大原社会問題研究所が所蔵する1931（昭和6）年2月1日付の『SETTELEMENT MONTHELY』No. 68には、オトギ学校の閉校式で35名の生徒が卒業したと報告された（前頁図版3）。

3 かこさとしの紙芝居と川崎セツルメント子ども会

日本が敗戦し戦後が始まると、1949年のケティ台風の被災支援活動を契機に翌年9月に東大セツルメントが再建され、各地で学生を中心とした積極的なセツルメント活動が復興する⁽²⁶⁾。1950年代後半に「平和で民主的な明るい社会を築こうという、戦後のセツルメントのスローガンは、子供会、勉強会、保健部、法律相談、あるいは栄養指導（食生活改善）等の形で着実にすすめられている」⁽²⁷⁾と報告される通り、1950年代前半から、江戸川区葛西、品川区大井、足立区亀有、川崎市、文京区菊坂、世田谷郷に次々とセツルメントの拠点が生まれていき、活動を行うセツラーたちによって診療所や保育園が設置され、法律相談や勉強会など活発な地域支援活動が繰り返された。

その拠点の一つである川崎セツルメントは、絵本作家の加古里子（かこさとし 1926-2018）が長きにわたって子ども会の活動に参加したことで知られている。1951年から活動を開始した川崎セツルメントは、戦災で焼け出された人を収容するため、企業が多摩川河畔の農地を買い上げて社宅を建てたことで発展した川崎市古市場の町を拠点に活動が行われた。古市場は、日本鋼管や東芝、日立造船等の工場が隣接する場所で、当時実施された川崎市保健所の衛生調査では居住者の67.1%を工業会社関係者が占めており、年齢構成は30代が最も多く、夫婦と子どもという家族構成が多かったことが報告されている⁽²⁸⁾。東京帝国大学を卒業し、人形劇団ブークに通って人形劇や紙芝居を学んでいた加古は、ブークの准劇団員から大井町で再開したセツルメントで人を探していると誘われ、1951年からセツルメント活動に参加した⁽²⁹⁾。そして、翌年から1970年までの約20年にわたって、会社員生活と両立しながら、川崎セツルメントで毎週日曜日に開かれた子ども会で創作の原点となる活動を繰り返していくのであった。「敗戦でそれまで信じていたものが全部ひっくり返ってしまって、大人はもう信じられない、信じられるのはこれからの日本を担っていく子どもたちだけだと思っていた僕にとって、セツルメントは、社会に出てから密かに抱き続けてきた志をようやく実践できる場でもあった」⁽³⁰⁾と、のちに加古は振り返るが、川崎セツルメント子ども会の初期には加古の他に、その後教育関係の現場で活躍した木下春雄や為本六花治、宍戸健夫らが参加しており⁽³¹⁾、子どもたちとの直接的な交流がセツラーたちのその後の人生に影響を与えたことは想像に難くない。

(26) 戦後の学生セツルメントの展開については、岡本周佳「戦後学生セツルメントの展開に関する研究」（東京福祉大学2019年度博士論文）に詳しい。

(27) 全国セツルメント連合書記局編『同じ喜びと悲しみの中で』三一書房、1957年、7頁。

(28) 「家」制度研究会／川崎セツルメント調査委員会編『労働者家族における諸意識と地域社会——古市場調査報告』上巻、1958年、8頁。

(29) かこさとし・鈴木万理『かこさとしと紙芝居——創作の原点』童心社、2021年、13頁。

(30) かこさとし『未来のだるまちゃんたちへ』文藝春秋、2016年、150頁。

(31) 宍戸健夫「私の体験的教育論」『愛知県立大学児童教育学科論集』1996年3月、25頁。

川崎セツルメントの子ども会では、紙芝居や人形劇、幻灯から歌唱指導、ゲーム遊びに至るまで様々な活動が行われている。特に紙芝居は「子ども会にふさわしい文化財」⁽³²⁾として、教育的成果の強いものであった。というのも、加古によると、子どもたちはただ見知らぬ物語を鑑賞するのではなく、既に見知った仲間たちが演じる舞台としての紙芝居を楽しむものであり、演じる側と観る側どちらもが気心知れた仲間だということは、極めて大事な紙芝居の要素を浮かび上がらせ、共通連帯の集団である子どもたちやリーダーを更に濃密に近づけ強固にする作用をおよぼすのだという⁽³³⁾。加古が制作した紙芝居は、従来の木枠から出し入れするものだけでなく、掛け図式であったり、超小型であったり、視覚的・触覚的にも子どもたちの心を掴む工夫が仕掛けられていた。その中でも記念碑的作品といわれ、1951年に掛け図式紙芝居として制作された『わっしょいわっしょいぶんぶんぶん』は、その後も幻灯や絵本作品など計7回も媒体を変え発表され、翌年の東京大学五月祭でも上演されている。

このような形態はともかくとして、紙芝居それ自体は戦前の帝大セツルメントでも託児の合同保育で行われていた。その内容は、「ユーゴの『レ・ミゼラブル』や、パンテレエフの『金時計』、ソヴェートの最初のトーキー映画『人生案内』」⁽³⁴⁾が脚色されたもので、「紙芝居の舞台の前がわを、旗を立てた子どもたちの切り抜き人形が、ピオニールの『小さい同志』の歌をうたいながら行進するというような演出」⁽³⁵⁾が加えられた、ソビエトの影響が色濃いものであったが、子どもたちから好評を得たという。対して、川崎セツルメントの子どもたちが楽しんだ紙芝居は、より子どもたちの「生活」に近づいたものが多かった。加古がセツルメント時代に制作した紙芝居は、動物が登場するもの、日本の民話を主題とするもの、そして子どもに身近な出来事を描いたものに分類される⁽³⁶⁾。子ども会で制作された紙芝居の中で、特に古市場の「生活」を意識して制作されたのが、戦争未亡人の母と幼い兄弟が登場する『ぼくのかあちゃん』（1953年）と、工場の事故で亡くなった父のことを題材にした『自転車によってったお父ちゃん』（1955年）の二つであった。後者はセツルメントに通っていた子どもの実話に基づいており、1958年発行の『川崎セツルメントこども会活動作品集』には、「生活紙芝居」と題して同作が掲載されており、編集人の加古による次のようなコメントが付されている。

お姫様や、小人や人魚や赤い風船——そういった童話もいい。けれど子ども達の生活をそのままえがきだしてみたら、子どもたちは逃げて行くだろうか。そつぽをむくだろうか。今まで所謂「生活童話」が子どもたちからそつぽを向かれがちだつたのは、こどもの生活や心をしらないところで書いていたのでないだろうか。そしてそれを待ちうけているのではなく、持って行く能動の形の“紙芝居”にしたら——そんな考えで、生きている子供たちの生活に取材してつくったものの一つです。⁽³⁷⁾

(32) 加古里子「子ども会と紙芝居」堀尾青史・稲庭桂子編『紙芝居——創造と教育性』童心社、1972年、262頁。

(33) 同上、263-264頁。

(34) 教育紙芝居研究会編『教育紙芝居』新評論社、1956年、36頁。

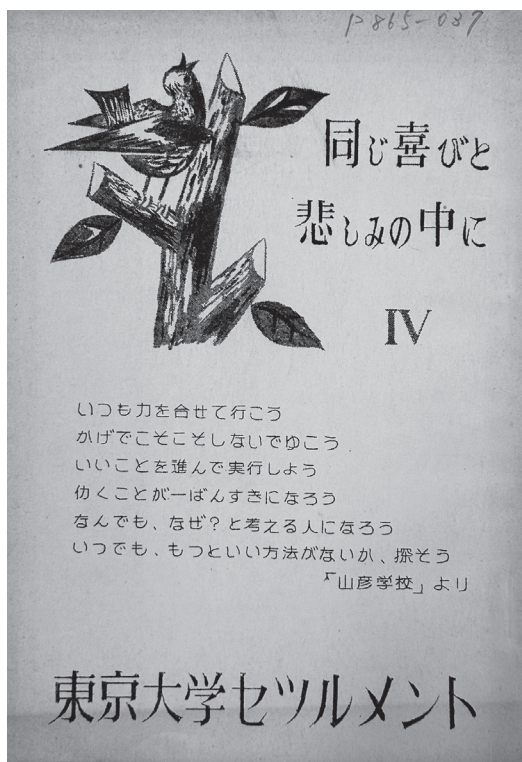
(35) 同上。

(36) 註(29)前掲書、24-27頁。

(37) 川崎セツルメント児童部編『川崎セツルメントこども会活動作品集』1958年5月1日、22頁。

ここでいう「生活」とは、無着成恭の『山びこ学校』（青銅社、1951年）に端を発する生活綴方運動の「生活」である。全国的に生活綴方運動が隆盛を極めていく中、その影響は戦後の大学セツルメントにも明らかで、例えば東京大学セツルメントの機関紙『同じ喜びと悲しみの中に』第Ⅳ号の表紙にも『山びこ学校』からの一節が引用されている（図版4）。また、引用したコメントで強調された「生活童話」とは、1938（昭和13）年にプロレタリア児童文学運動が解体された後に、童話作家の槇本楠郎（1898-1956）によって提唱された「生活主義童話」のことであろう。これは、プロレタリア児童文学の流れを汲んだ集団主義的意識が強いもので、現実の生活を描くよりもむしろ、その生活に即した子どもたちの社会性の発達を目的としていた。セツルメントの子どもたちが勉強会で書いた作文と、別の子どもが書いた絵を組み合わせた『ぼくのかあちゃん』や、同じく古市場で暮らす女の子の実話に基づく作文を紙芝居にした『自転車にのってったお父ちゃん』は、どちらも川崎セツルメントの地域で暮らす家庭の「生活」をうつし取ったものである。のちに幻灯にも焼き直された両作品は、他地域のセツルメントでも上映され、氷川下セツルメントで『ぼくのかあちゃん』が披露されたときには、「子供も、お母さんも涙を流してそれに見入った。終わったあとで『もう一度』と言われたのも、これがはじめてだった」⁽³⁸⁾と報告されている。加古の紙芝居作品には幻灯版が制作されているものも多く、日本映画史研究者の鷺谷花によると、1953年11月に幻灯版が制作された『私たちのまちとつるつるめん』は、「同時代の生活綴方・生活記録運動に呼応しつつ、その理念を紙芝居、さらには幻灯という別のメディアによって展開することを試みた最初の実践」⁽³⁹⁾であるとされ、このような「生活の記録に基づく『生活芸術』としての幻灯の創作活動は、外部者としてのセツルメントが、地域社会の生活に近づき、生活体験と生活感情を理解し、内部に場所を確保するための手段として確実な有効性をもつものだった」⁽⁴⁰⁾とまとめられている。確かに、これらの「生活」を題材にした創作活動は、人々の暮らしの場から眼差すことで見出せる

図版4 『同じ喜びと悲しみの中に』Ⅳ
東京大学セツルメント発行、1950年代、
法政大学大原社会問題研究所蔵



(38) 「氷川下の子どもたち 集団記録 氷川下セツルメントの手記」『新女性』51号、新女性社、1955年4月、16頁。

(39) 鷺谷花「『生活芸術』としての幻灯——東大川崎セツルメントによる幻灯創作活動を中心に」『映像学』90号、日本映像学会、2013年、10頁。

(40) 同上、23頁。

「アート」であり、セツルメントがその地域に根ざした確固たるあかしとも言えるだろう。

4 興望館セツルメントと現代アートの実践

最後に、「アート」の中でも現代アートとセツルメントが交錯した事例として、興望館セツルメントにおける近年の実践を紹介したい。墨田区京島に位置する興望館セツルメントは、1919（大正8）年から現在に至るまで、主に児童福祉に関する事業を中心に活動を続けているキリスト教系のセツルメント施設である⁽⁴¹⁾。この場所を舞台に、現代アートの試みを実践しているのが、セツルメントを糸口に様々な展示やワークショップを企画するインデペンデント・キュレーターの青木彬である。アートプロジェクトの一つの源流としてセツルメント運動を捉えている青木は、「他分野との協働も日常的になってきている近年の『アートプロジェクト』においては、作品至上主義な『アート』の価値観で美学的な判断を迫るよりも、これまでの美術史からは見落とされてきた『創造力』の歴史の中に自分たちの活動を位置付けたほうが、複雑だと感じていた『アートプロジェクト』の意義がもっとはっきりしてくるような予感」⁽⁴²⁾があったことから、大正時代に興ったセツルメント活動に関心を抱いたという。2018年から「ファンタジア！ファンタジア！——生き方がかたちになったまち」と題して墨田区を拠点としたアートプロジェクトを展開している青木は、2019年7月に墨田区内で活動する文化活動団体の交流会を通して興望館の職員と知り合ったことを契機として、翌年の12月にオンラインでトークイベントを開催する。2021年の春からは興望館との協働プログラムを開始し、同年11月にアーティストの碓氷ゆいを招いて「トナリのアトリエ」と名付けたワークショップを実施した。「トナリのアトリエ」では、学童クラブを利用する子どもたちを対象に全6回のワークショップを行い、子どもたちが描いた絵日記などが1回ずつ1冊の本にまとめられている⁽⁴³⁾。そして、このような実践を経て、2022年11月に、興望館に残された膨大なアーカイブズから厳選した資料と、碓氷による新作を展示した「共に在るところから／With People, Not For People」が開催された（巻頭iv頁③④⑤）。会場では、興望館セツルメントの辿ってきた歴史が垣間見えるガリ版や写真、詳細な年譜、解説パネルのほか、セツルメントの職員と思しき架空の女性の日誌が当時の写真と共に一直線に並べられ、興望館関係者と共に制作したという手芸品が取り囲むように配置された碓氷のインスタレーションが発表された。《家はうたっている》と題されたこの作品は、2021年から開始したりサーチを源泉としており、興望館に保存されていた保育日誌や写真資料から着想を得たものである。美術学校の刺繍科を卒業し、興望館セツルメントで働き始めたという架空の人物は、近隣の主婦や子どもたちと接しながら、「ケア」と「アート」の距離感を探っていく。「寺島町の人達に信頼してもらうことは勿論、私も皆が持っている創造力

(41) 1943年に財団法人興望館、1952年に社会福祉法人興望館と名称を変更している。詳しい沿革は社会福祉法人興望館 Web ページ [http://www.kobokan.jp/about_history.htm] に記載されている。

(42) 『アートと名付けられない創造力へ向かって』公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京、2022年、8頁。

(43) ワークショップの様子は、ファンタジア！ファンタジア！ Web ページ内の「【プラクティス】トナリのアトリエ編集後記」[https://fantasiafantasia.jp/archives/348] [https://fantasiafantasia.jp/archives/366] に詳しく報告されている。

を心から信頼している。それは人生における芸術の真の働きのために、必要なことだろう」と結ばれる日誌からは、特定のコミュニティに入り込み、地域に根ざしながら、「主体となる個人あるいは集団にとって、それをとりまく日常的状況をより深く、美しいものに向かって変革するという行為」⁽⁴⁴⁾としての「アート」の実践者としてのセツラーの姿が想像されるだろう。これまでも社会や歴史から看過されていく出来事に焦点を当て、手芸の技法を用いて作品を発表してきた碓氷は、「アッセンブリッジ・ナゴヤ 2019」で発表された《要求と抵抗》でもセツルメントから派生した活動に焦点を当てている。展示会場では、開催地である名古屋市で1972年に起こった保育園の自主管理闘争を起点として⁽⁴⁵⁾、当時のガリ版や写真と共に「団結」と大きく施されたエプロンが掲げられた。「この運動はケアの現場、そこにいた女性たちが立ち上がった印象を受け」⁽⁴⁶⁾たと碓氷は語るが、興望館での展示もまた、作家自身の境遇とも重なる葛藤を抱えた女性セツラーの視点から、福祉の現場と「アート」を結ぶ手がかりとなる試みだと言えるだろう。

おわりに

以上、戦前と戦後、そして現代セツルメントにおける「アート」の実践を概観した。本稿で取り上げた事例は、既に知られた作家たちが携わったものが多くなってしまったが、碓氷が制作した架空の日誌のように、名も知れぬ表現者としてのセツラーの姿や、川崎セツルメントの子どもたちなど地域の人々の存在があっこそ、生活そのものに深く根を生やし、生きていくために必要な「アート」が生まれていく。大原社会問題研究所に所蔵されているセツルメント関係資料には、そのような広がりのある「ケア」と「アート」の縁が透け見えるのである。

(ふるいえ・みつは 長野県立美術館学芸員)

(44) 註(4)前掲書、52頁。

(45) 同地では、1959年の伊勢湾台風で被災した弥次エ町の子どもたちに向けて、ヤジエセツルメントという保育を中心としたセツルメント活動が行われている。

(46) 『美術手帖』74巻1092号、美術出版社、2022年2月、44頁。